

宮田光雄先生が著した『カール・バルト 神の愉快的パルチザン』から、教えられたバルト神学について、私の理解と意思をもう一度書いてみたい。

バルト神学の出発は『ローマ書』であった。『ローマ書』は「圧倒的な高い存在、遠い存在、疎遠な存在」として「神の神格性」が強調され、「上から垂直に」突入してくる「絶対他者」である神と、人間とのあいだに「無限の質的差異」が指摘され、神的なものとの世とは「円の切線」のように接触するに過ぎない、と説かれていた。

1956年に『神の人間性』と題する、神と人間とを接近させるような講演をし、驚かせたという。宮田先生は、この講演を『教会教義学』と関連して、下記のように注解している。「神が人間に語りかけ、人間を契約可能なパートナーとすることによって、はじめて人間は主体となる。近代の人間がみずからの解放を求めて目指してきた自由は、イエス・キリストに出会う神の中にこそ見いだされる。みずからを神と取り替えようとする代わりに、人間は、キリストによって解放されることによって、はじめて神と他者とに開かれた責任を負う『成人性』を獲得するのだ。ここから人間が、時間と空間の中で歴史に積極的に参加する道が開かれるであろう。」神は人間をパートナーとして、主体性を認め、キリストに解放された者として、他者と関係性を持ち、歴史に参与する道を開いてくださると言う。また、バルト自身が「教義学の頂点」と断言している「予定説」について下記のように書いている。「選びの自由な恵みが人間の力強い神的な定めであり、しかし、すべての者に当然妥当した棄却は同じような力強さで、神によって人間の定めとしては否定される。天国は開かれ、地獄は閉ざされ、神は正しいとされ、悪魔は反駁され、生命は勝利をおさめ、死は克服され、この約束を信じる信仰は唯一の可能性であり、この約束にたいする不信仰は排除された可能性である」。選びの予定は神の恵みの決定事項であり、選ばれていないという棄却は否定される。地獄と悪魔は駆逐され、死のとげは抜かれ、生命は勝利し、天国は開かれている。この約束を排除することは不可能であると言う。キリスト論的集中が明確にされた神の恵みが神学の中心に据えられ、神の大いなる「然り・ヤー」が力強く主張されている。この神の「然り」が今を「力強く、落ち着いて、希望とユーモアをもって」生きる基盤となる。そして、バルトは「神によって、イエス・キリストにおいてすでに実現されており、その実現された姿において究極かつ最終的に再びイエス・キリストにおいて啓示されるであろうという希望と約束とにもとづいて生きているのだ」と、終末論的待望の光の下で、「時の間」に生きる者は最終的に啓示される「神の国」を目指す責任倫理が与えられていると書いている。

バルトが語る「究極的なもの」と「究極以前のもの」は興味深い。「究極的なもの」とは神に関わることで、「究極以前のもの」とは時間と空間内の出来事である。終末論を強調する立場は「究極以前のもの」の価値を奪い、歴史に対する責任を回避しがちになる。バルトは「その形のどの一つをも、けっして究極的な真剣さで受けとめるのではない。それらにふさわしく、そのいずれをも、ただ最後から一歩手前の真剣さでしか真剣に受けとめることができないのである」と、終末論的希望は「究極以前のもの」を一歩手前の真剣さで向き合うと語っている。「究極以前のもの」は「究極的なもの」に包括されているからである。神を問うことは歴史内の出来事に責任的に関わることなのである。

バルト神学はどこを読んでも福音的説教を聞いているようで、励まされる。神の「然り」を聞いた者として、自由に、そして積極的に生きることを喜べるからである。